

急性虚血性脳卒中には血栓除去術が有益

2015年に、5件のランダム化比較試験において脳前方循環近位部閉塞による急性虚血性脳卒中患者には、標準的な内科治療よりも血栓除去術が有効であることが示されている。本研究では、それらの試験の全被験者データを分析し、特性の異なる患者集団全体においても治療の有効性が認められるかを検討した。

対象となったのは、2010年12月から2014年12月に実施された試験、MR CLEAN、ESCAPE、REVASCAT、SWIFT PRIME、EXTEND IAの5件であった。これらの試験では、急性虚血性脳卒中患者について、発症後12時間以内に血栓除去術を施行する群または標準的な内科治療を行う群（対照群）にランダムに割り付け、90日時点での障害重症度の軽減を評価した。解析には1,287例のデータが組み込まれ（血栓除去群634例、対照群653例）た。解析の結果、血栓除去群は、対照群と比べ90日時点の障害重症度が有意に低かった（補正後共通オッズ比2.49、 $p < 0.0001$ ）。また、80歳以上の患者や、発症からランダム割り付けまでの時間が300分を超えた患者、rt-PA静注療法が不適の患者といった特定の階層群では血栓除去術の効果が大きかった（共通オッズ比はそれぞれ3.68、1.76、2.43）。90日時点での死亡率、硬膜下血腫および症候性頭蓋内出血リスクについては治療群間で差はなかった。

したがって、患者特性にかかわらず大半の脳前方循環近位部閉塞による急性虚血性脳卒中患者に有益なのは血栓除去術であることが示された。この結果は、脳主幹動脈梗塞による急性虚血性脳卒中患者へのタイムリーな治療を提供するシステムの構築に大きな意味をもつであろう。

出典：Lancet. Published online Feb 18, 2016; pii: S0140-6736(16)00163-X